

特 260
107



始



特 260
109

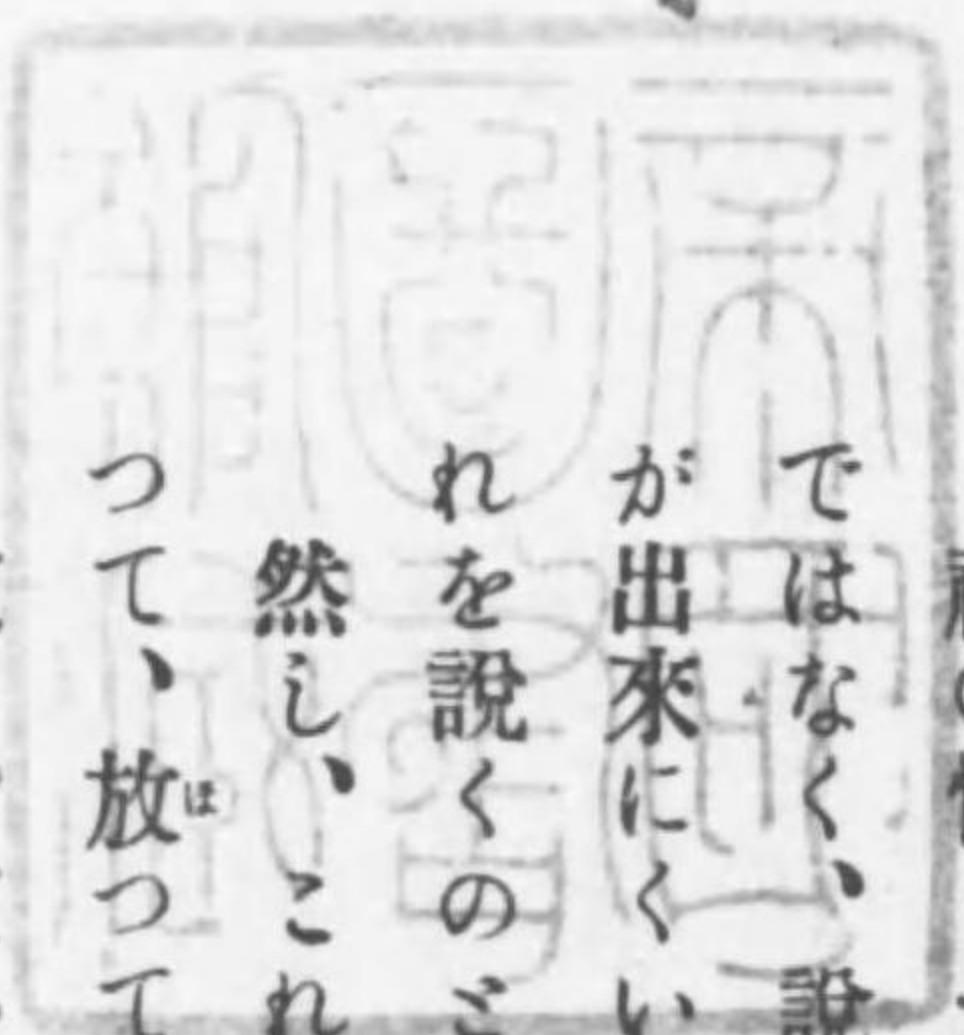




十牛圖に題す

禪の悟りが説きにくいと云ふ事は、説く事が出来ないと云ふの
ではなく、説いても聞く人が、それだけ心の準備がないと、納得
が出来にくいと云ふのであつて、丁度、塩の味を知らぬ人に、こ
れを説くのご同様である。

然し、これを説きにくい、聞く者が解りにくいから説かぬと云
つて、放つて置いては、各自の心田を開発する事は愈困難となつ
て来る、だから禪家歴代の祖師方は、何れも種々な方便を垂れて
禪の妙味を嘗めぬ人々に、これを嘗めさせたいこの大慈悲心を以



て、種々努力されて居る。

この十牛圖も亦、その慈悲方便の一つであつて、總序に依ること、清居禪師の牧牛圖から、支那鼎州梁山に住した、臨濟十二世の孫廓庵師遠禪師が更に工夫を重ね、頌を加へ、圖を完成せられたこと云ふ事になつて居る。序は慈遠和尚と傳へ、石鼓、壞納の二和尚が頌に和韻し、東福徹書記が歌を加へられて、現在世に行はれて居る、四部録中の十牛圖が成立した。

これによること、我々の心を一匹の牛に譬て、本來自由自在に働かざるべき我々の本心が、足る事を知らぬ、慾の捕虜となり、苦悶懊惱、その自由を失つて居る。吾等は如何にすれば、この本心を發明し、我が身の靈光を發揚し、人格を完成、活殺自在の妙用を得

べきかと云ふ、修養の過程と理想とを、順序よく、具体的に、然も巧妙に指示されたものであつて、佛教眞理を求尋する、最もよき象徴的表現と見るべきである。

これは常に佛道のみならず、武道、茶道、花道、書畫道等百般の技藝道に、あてはむるも亦至妙の味がある。

かくお互が、この圖の如く、心を磨けば、吾々凡夫も聽ては佛となる事が出来、衆生本來佛なりこの大心境を悟り得て、心牛の眞の面目に接する事が出来る。

一、尋牛 衆生が迷ひのために失つた本心の靈牛を尋ねるに始り。

二、見跡 苦心修行、漸く牛の足跡を見出し。

三、見牛 次いで牛の姿を見つけ。

四、得牛 あばれる牛を捉へ。

五、牧牛 草を與へて、牛を手なづけ。

六、騎牛歸家 牛に安心を與へ、手綱もなく、悠々牛に騎り、
笛を吹きつゝ、家に歸り。

七、忘牛存人 小屋に入れて牛を忘れ。

八、人牛俱忘 人も牛も共に空じ、二つの束縛を離れ、一圓相
の如く、靈空となり。

九、返本還源 修行成就し、その悟り得た心境を以て、再び妙
有の實社會に歸り。

十、入塵垂手 布袋の心を心とし、この濁世に處して、自在に

活動し、三十三身を現ずる觀音の如く、世を善
導利益する。茲に天地一杯の靈牛、心牛は思ふ
存分に活動する事が出来るのである。

國家の前途極めて多事且つ多難の秋、一層切實にこの圖の意義
を再認識する事が必要であつて、各自心田の開拓に務め、しつか
りこ、天地に充滿するこの心牛を擱まへて、腹を造り、宇宙を我
が家とし、友に慈悲して、世界を樂土化せんとする、我が國体の
貴き使命を如實に、見届ける事が、何より目下の急務である。

一、尋 牛

茫茫撥草去追尋。水闊山遙路更深。
力盡神疲無處覓。但聞楓樹晚蟬吟。

茫茫として草を撥ひ去つて追尋す。水闊く山遙かにして路更に深し。
力盡き神疲れて覓むるに處なし。但だ聞く楓樹晚蟬の吟ずることを。

和 歌

尋ね行くみ山の牛はみえずして
たゞうつせみの聲のみぞする。

たづね入る牛こそ見えね夏山の
梢に蟬の聲ばかりして。

二、見 跡

水邊林下跡偏多。芳草離披見也麼。
縱是深山更深處。遼天鼻孔怎藏他。

水邊林下跡偏に多し。芳草離披たり見るや也た麼や。
縱ひ是れ深山の更に深き處なるも。遼天の鼻孔怎ぞ他を藏さん。

和 歌

こゝろざしふかきみ山のかひありて
しほりの跡をみるぞうれしき。

おぼつかな心づくしにたづねれば
行衛もしらぬうしのあとかな。

三、見 牛

黄鶯枝上一聲々。日暖風和岸柳青。

只此更無迴避處。森森頭角畫難成。

黄鶯枝上一聲々。日暖に風和かにして岸柳青し。

只此れ更に迴避する處なし。森々たる頭角畫けごも成り難し。

和 歌

青柳のいとの中なるはるの日に

つね遙かなるかたちをぞみる。

ほえけるをしるべにしつゝあら牛の

かげみるほごにたづねきにけり。

四、得 牛

竭盡精神獲得渠。心強力壯卒難除。

有時纔到高原上。又入煙雲深處居。

精神を竭盡して渠を獲得す。心強く力壯んにして卒に除き難し。

有時は纔かに高原の上に到り。又煙雲の深處に入つて居す。

和 歌

はなさじとおもへばいと心うし

是ぞまことのきづななりけり。

とり得てもなにかとおもふあら牛の

つなひくほごにこころづよさよ。

五、牧 牛

鞭索時々不離身。恐伊縦步入埃塵。
相將牧得純和也。羈鎖無拘自逐人。

鞭索時々身を離れず。恐らくは伊が歩を縦にして埃塵に入らんことを。
相將て牧ひ得れば純和せり。羈鎖拘ること無く自ら人を逐ふ。

和 歌

日數へて野がひの牛も手なるれば

身にそふかけとなるぞ嬉しき。

尋ね來しまきのうね牛どりえつゝ

かひ飼ふほごにしづかなりけり。

六、騎牛歸家

騎牛迤邐欲還家。羌笛聲々送晚霞。
一拍一歌無限意。知音何必鼓唇牙。

牛に騎つて迤邐として家に還らんと欲す。羌笛聲々晚霞を送る。
一拍一歌限り無き意。知音は何ぞ必ずしも唇牙を鼓せん。

和 歌

すみのぼる心の空にうそぶきて

たちかへり行く峯のしら雲。

かへり見る遠山道の雪消えて

心の牛にのりてこそ行け。

七、忘牛存人

騎牛已得到家山。牛也空兮人也閑。
紅日三竿猶作夢。鞭繩空頓草堂間。

牛に騎つて已に家山に到ることを得たり。牛も也た空じ人も亦閑なり。
紅日三竿猶ほ夢を作す。鞭繩空しく頓く草堂の間。

和歌

よしあしとわたる人こそはかなけれ

ひとつ難波のあしとしらすや。

しるべせむ山路のおくのほらの牛

かひかふ程に静かなりけり。

八、人牛俱忘

鞭索人牛盡屬空。碧天遼闊信難通。
紅爐焰上爭容雪。到此方能合祖宗。

鞭索人牛盡く空に屬す。碧天遼闊として信通じ難し。
紅爐焰上争か雪を容れん。此に到つて方に能く祖宗に合ふ。

和歌

雲もなく月もかつらも木もかれて

はらひはてたるうはのそらかな。

もとよりも心の法はなきものを

夢うつとは何をいひけむ。

九、返本還源

返本還源已費功。爭如直下若盲聾。
庵中不見庵前物。水自茫茫花自紅。

本に返り源に還つて已に功を費す。争か如かん直下に盲聾の若くならんには。
庵中には見えず庵前の物。水は自ら茫茫花は自ら紅なり。

和歌

法の道あとなきもとの山なれば

松はみどりに花はしらつゆ。

そめねども山はみどりになりにけり

おのがいろく花もなきなり。

十、入塵垂手

露胃跣足入塵來。抹土塗灰笑滿頤。
不用神仙真秘訣。直教枯木放花開。

胃を露し足を跣にして塵に入來る。土を抹り灰を塗つて笑ひ頤に滿つ。
神仙真秘の訣を用ゐず。直に枯木をして花を放つて開かしむ。

和歌

手はたれて足はそらなるおごこ山

かれたる枝に鳥や住むらん。

身をおもふ身をば心ぞくるしむる

あるにまかせてあるぞあるべき。

399
554

十牛圖

頌	一	尋牛圖	東達老師	妙心寺派前管長
	二	見跡圖	至道老師	南禪寺派管長
	三	見牛圖	大休老師	妙心寺派管長
	四	得牛圖	湘山老師	妙心僧堂師家
	五	牧牛圖	愚溪老師	妙心寺派前管長
	六	騎牛歸家圖	徹宗老師	妙心寺派八幡口福寺管長
	七	忘牛存人圖	要宗老師	大德寺派管長
	八	人牛俱忘圖	精拙老師	天龍寺派管長
	九	返本還源圖	默雷老師	建仁寺派管長
	十	入廓垂手圖	獨山老師	相國寺派管長
版			德力富吉郎先生	畫並刻

昭和十四年十一月十五日印刷
昭和十四年十一月二十日發行

編輯者 後藤光村
發行所 京都市竹屋町高倉東入 内田美術書肆
印刷所 京都市四町 法輪寺

終